

鹽引かはらけ何も金すし 炙物かく

繪鮒 御飯 箸臺

かうの物 いてもこみ 桶金かく

〔配酌之用法〕食物作法

食物食様の事 常の食の時は不可食、是は湯菜なり、湯漬とはかくべつ成べし、略中

湯呑様の事 常の食の時は、湯の中へ箸を入べし、湯漬の時は、箸入事ニ不及、湯一口吞て香物を食、度々に香物を食候事不宜、

〔醒睡笑六の噂〕一兒の膳にかうのもののあるを、脇に居たる僧とりて食ふ、兒我が秘藏に思うて

置いたるをと云はる、時彼坊主一つは御膳に候と存すれば、何とやなつかしさに、又はつねの

よりもよくなるが、面白きにと申したり、兒腹を立て、なるが面白くば鐵炮をくはれよと、

〔貞丈雜記六進物〕進物はすべて詞のとなへ悪しき事を遠慮すべし、進物ならずとも、常にも此心得

有べし、略中 香の物三切をいむ事も、功の者身切れと云ふに似たり、

〔翁草八〕河村瑞軒成立之事

十右衛門軒 事○ 事かゝる卑賤の業○ 車に暮すと雖も、生得其心廣く、才智拔群の者成しが、或時不

圖思ひ付キ、上方に行て身の安否を究んと、僅の諸道具を賣て、金貳三步肌に著け、小田原迄來て

一宿せしに、相宿に老翁有○、略中 翁笑ふて、今繁昌の江戸を捨テ上方へ行、何の立身か有ん、情御

邊の人相を見るに、大キに家を起すべき相あり、不如江戸にて勵まれんにはと云、十右衛門つく

づく此の翁を見るに、唯者ならぬ氣性顯れければ、忽ち得心して、實にも翁の異見尤也、然らば江

戸にて一ト勵致して見シと、翁に別れて、江府へ引返シ、品川を通けるに、折節七月盆過ギにて、瓜

茄子、夥敷磯端に流れ寄しを、不圖心付て其邊の乞食共に錢を取らせて取上ゲさせ、所縁の所に